

# 強者の戦略

## 【第8回】情報展開と英作文（上本）

### 前書き

さて、今回は添削という形式にしていました。《英訳例》の英文はどのように修正・改善できるのでしょうか。自分なりの改善案は決まりましたか？ まず問題の確認をしておきますね。問題編では以下のような日本文と英訳例を提示しました。

以前、中国武道の達人から「日本人は習いたがりすぎる」という話を聞いたことがある。

日本人は何かというと道場に通いたがるが、一度習ったら一ヶ月くらいは道場には、来なくていいというのだ。道場で教えてもらうのは、何をすればいいかを教わるだけであって、それを知っただけでは身につかない。道場で習ったことを、一人で練習を繰り返して、はじめて技は身に付く。

### 《英訳例》

**It is what they should do that they are instructed in dojo, and just by knowing it they cannot do.**

上記の《英訳例》を見て、気になる箇所はいくらかあります。そこで、差し当たって検討されるべき点を以下に列挙しました。

- 1 instructの用法は妥当か？
- 2 theyが指すものを明確にする必要性は？
- 3 it is ~ thatの強調構文は妥当か？
- 4 dojoはそのままで良いのか？
- 5 「身につかない」はdoで良いのか？

同様の感想を持った人もいたのではないのでしょうか？ あくまで検討事項という段階なので、上記5点が全て間違いである、というわけではありませんが、改善の余地があるのならば、それを洗練して、より見栄えのする形へと磨き上げるようにしましょう。

# 強者の戦略

## 1 instructの用法は妥当か？

この **instruct** の用法は誤りです。確かに **instruct** は **teach** に近い意味を持ちます（**instruct** の方が **teach** よりも形式張った語になります）。しかし、語法の点では異なっているので、注意が必要です。**instruct** と **teach** は次のように使います。

**instruct O in A** : O(人)に A(物)を教える  
**teach O<sub>1</sub> O<sub>2</sub>** : O<sub>1</sub>(人)に O<sub>2</sub>(物)を教える  
**teach O** : O(物)を教える

**teach** は第3文型・第4文型を取るのに対して、**instruct** は **O in A** の形で第3文型しか取りません。しかも目的語は原則的に⊙です。従って受動態も "**O is instructed in A**" となります。今回の英作文を構造分析してみましょう。

It is what they should do that they are instructed ▲ in dojo

強調構文によって前方移動している要素と、そのもとの位置に注意します。上図を見て、この《英訳例》では "**O is instructed A**" という間違っただけの受動態をベースにしているため、文法上誤りであると指摘することができます。

正しい文にするために、動詞は **teach** を使います。"**teach them what SV**" からの受動態変換で、**they are taught what SV** が正しい形になります。

## 2 theyが指すものを明確にする必要性は？

確かに、ここまでの文脈を考慮して、**they** では「日本人」と「中国人」の両方を受ける可能性を持ってしまい、**they** のままでは曖昧な指示語ということになってしまいます。それでは、明確にするとすれば主語に何を置くべきなのでしょう？

一つには、段落頭で「日本人は」と始められているので、ここでは「日本人」の道場に対する姿勢について説かれていると解釈することができます。従って、主語を明示するとすれば、**they** ではなく **the Japanese** と置く方がより明確な英作文とすることができます。

ただしもう一つの解釈で、この下線部に関しては「中国人」「日本人」の具体的な区別はしておらず、一般的な道場に対する姿勢を主題としているとも解釈できます。このことから、あえて **the Japanese** や **the Chinese** として特定の国民として明示せず、"**what is taught in dojo**" と一般論として書くこともできます。こうすれば、特に「どの国の人にとって」と国民を限定せず、一般にどの国民にとっても、という意味を出すことができます。曖昧な **they** の使用と、日本語では省略されていて、そもそも曖昧になっている主語を明示することなく英作文することができます。

# 強者の戦略

## 3 it is ~ thatの強調構文は妥当か？

「…なのは～だ」という日本語から、《英訳例》では it is ~ that の強調構文を用いて英作しましたが、ここには改善の余地があります。その改善方法について見ていきましょう。

it is ~ that の強調構文には**情報展開**が関係します。情報展開という視点では**新情報・旧情報**を意識します。新情報とは文脈上、初めて出てくる情報のことであり、「昔々或る所に一人の若者が住んでいました」における「或る所」「一人の若者」がそれに当たり、新出情報とも呼ばれます。旧情報とは文脈上、既に言及された情報のことで、「その若者は日々畑仕事に精を出していました」と続く「その若者」がそれに当たります。既に言及された情報であることから、旧情報は既知情報と呼ばれることもあります。

この新情報・旧情報について、英語ではそれらの配置を意識し、**文頭に近い方に旧情報、文末に近い方に新情報**を置きます。そうすれば情報展開がスムーズに流れるからです。日本語にも同様のことが言えるので、上に述べた段落でその例を見ましょう。

it is ~ that の強調構文には **情報展開** が関係します。 **情報展開** という視点では **新情報・旧情報** を意識します。 **新情報** とは文脈上、 **初めて出てくる情報** のことであり…

1文目で情報展開という言葉が文末に近いほうに置きました。その後の2文目ではその情報展開という言葉から始めています。「何のことかな？」と**気になる語が1文目に新出して、そのすぐ後に期待する説明が来る**ので、展開としては非常にスムーズです。簡略化すると以下のようになります。

it is ~ that の強調構文には **p** が関係します。 **p** では **q** を意識します。 **q** とは **r** のことであり…

また、参照用として文頭旧情報・文末新情報の配置を逆にした文を見てみましょう。

**情報展開** が it is ~ that の強調構文には関係します。 **新情報・旧情報** を **情報展開** という視点では意識します。文脈上、 **初めて出てくる情報** のことが **新情報** であり…

こちらを簡略化したものを次のページに載せます。

# 強者の戦略

**p**が it is ~ that の強調構文には関係します。**q**を **p**では意識しません。**r**が **q**であり…

この配置では初めて見る情報（「情報展開」という語）が唐突に出てしまい、それを受ける語が来ないうちにまた初めて見る情報（「新情報・旧情報」）が出てしまっています。その結果、**新情報と旧情報が交錯してしまい、非常に読みづらくなります**。この読みづらさを避けるために、文頭旧情報・文末新情報の配置に気を配るのです

※ただし、これは義務的な配置ではなく、より自然な文章の流れを作るときに意識する配置になります。従って、実際に英文を読んでいると旧情報が文末に近いところに置かれている文も見かけられます。しかし、より高度な英作文が要求されるような大学を目指す場合には、この点も意識してください。強者への道では「通じるからそれで良い」よりは「洗練されている」と評価されるレベルの英作文を目指します。

そこで it is ~ that の強調構文との関連についての説明に入ります。it is ~ that の強調構文は**強調したい語句を前方に切り離す語順操作**をする構文でした。原則的に強調される語句は文頭付近に配置する情報となるので、**旧情報**を置くのが自然です。実際、強調構文になりやすいパターンで、"it is 特定名詞 [the/this+Ⓞ など] that SV" という形がありますね。前方に切り離すことになるので、**前からの情報を受ける旧情報が強調されやすくなります**。

それに対して新情報を強調する場合に用いる別の強調表現があります。**what**や**all**を使った**強調構文**で、次のような文になります。

例 1 ) **What** he is lacking in **is** courage. 「彼に欠けているものは勇気だ」

※ He is lacking in courage. の courage を後方に切り離して強調

例 2 ) **All** you need **is** love. 「君に必要なのは愛だけだ」

※ You need love. の love を後方に切り離して強調

(All の後には関係代名詞 that が省略されている)

こちらの強調構文は**後方への切り離しになるので、新情報の強調に用いられます**。また what と all では、all の方が「～だけ」という意味合いがより強く出るという点で、違いがあります。「あなたが必要としている全ては愛だ（愛だけだ）」となります。「愛＝全部」ということは「愛だけ」ですね。

この情報展開という観点から今回の問題文を読み直せば、以下のようになります。

**道場で何かを教えてもらう** → **道場で教えてもらう** のは **何をすればいいか** である → **それ** を知っただけでは身につかない

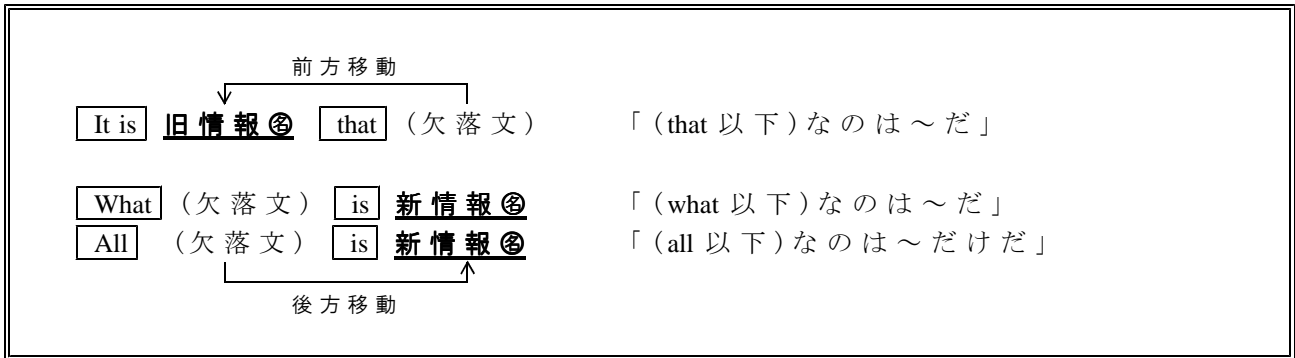
「道場で教えてもらうのは何をすればいいかである」という情報の配置をこのままにして書くには

**What[All] (道場で教えてもらう) is (何をすればいいか).**

# 強者の戦略

の形で書くこととなります。こうすれば「何をすればいいか what to do」という情報を、その内容を受ける後続の「それ」に近づけることができ、自然な流れの情報の配置となります。

では、まとめますね。以下に公式化して載せます。



※欠落とは本来あるべき名詞が欠けている状態のことで、欠落文とは欠落を含む文を指します

what is taught in dojo is what to do では what が重なるので、ここでは All を使って書くことにします。all that is taught in dojo is what to do 「道場で教えられるのは何をすればいいかだけである」とします。

## 4 dojoはそのまま良いのか？

これも気になるころだったのではないのでしょうか。一応 dojo という単語自体は、それを載せている英和辞典もあるくらいなのでそのまま dojo としても大丈夫です。ただ、この問題で道場を dojo と表記しても問題ないとしても、例えば別の問題で、「ちらし寿司」が含まれるような時でも同様に日本語読み通りの書き方の "chirashizushi" で表記しても良いかと言われると…、「うーん」と唸ってしまいますよね。このような時の対処法は知っておきたいものです。

こういう場合は、いったん「道場」は dojo と表してしまっって、その後に同格の説明を置きます。"～ is taught in dojo, a training hall,～"とするわけですね。他にも、"～ is taught in dojo, a place in which martial arts are practiced,～"と修飾語を使って説明的に書くこともできます。もちろん濫用は禁物ですが、日本語通りのそのまま表記では不安が残るような時には、「同格」で補助的に説明を付けるとその不安に対処することができます。

※ちなみに「ちらし寿司」は vinegared rice with egg and sea food on its top など書くことができます

## 5 「身につかない」はdoで良いのか？

《英訳例》では "and just by knowing it they cannot do." としていますが、「何かをする」というときの do は原則他動詞です。従って文法上、it などの目的語を置く必要があります。it があれば and 以降の文に間違いはありません。

これで一先ず間違いはなくなったのですが、ここに留まらずさらにワンランク上

# 強者の戦略

の訳出法も考えてみたいと思います。「身につかない」の部分についての広がりとして、know や do 以外にももう少し別に表現の仕方がないかを探求します。この文章の内容面を改めて読み直してみると、「それを知っただけでは身につかない」とは「**頭で分かっているけど体が動かない**」あるいは「**理論だけでは実践には繋がらない**」ということ在意図している内容だと分かります。この部分は「**理論 theory**」と「**実践 practice**」を利用して英作文することができそうだと分かります。日本文における「身につく」を「理屈で分かっていることが実践できる」と置き換えて表現することができます。

以上、**1**～**5**の改善点を反映して英作文を書き直せば以下ようになります。

**All that is taught in dojo, a training hall, is what to do, but the knowledge alone does not combine theory with practice.**

## 後書き

今回は添削者という立場から問題に取り組みました。英作文においては、他人が書いたものを添削することができるようになり、やがては自分が書いたものを添削できるようになることを目標とするのが上達のコツになると思います。そのためには語彙力・文法力の強化や、よりレベルの高い英文を書くための情報展開という概念も習得していきたいですね。

ほんの短い英文にもたくさんのポイントが含まれていました。僕自身、解説を書いていて、偶然にもこの問題に出会えて良かったと思えました。出会いは縁、良い問題、良い英文、またここで皆さんに出会えていることも、きっとひとつの縁なんだなあとしみじみ感じた今回の強者への道でした。^^)